

## 接続詞に注目した大学講義理解の試み —専門科目の講義をもとに—

三宅 若菜 ・ 福島 智子

### 要 旨

石黒 (2007) を参考に、接続詞に注目し講義資料を分析した。その結果、講義における教師の発話において、接続詞の出現頻度が非常に高く、特に、話の変わり目を示す部分に高く出現していることがわかった。また、接続詞「で」を多用するという石黒 (2007) の結果を実証することができた。

そして、留学生が大学の講義に参加できるようになることを目標とした日本語授業において、この分析結果を活動に取り入れた。活動の中で、学習者は、接続詞を意識化し、講義内容を予測したり、講義の構造を認識したりしていた。また、講義の中心的内容を理解し、要点をノートにまとめていたこともわかった。

【キーワード】 講義理解、接続詞、講義の構造、専門科目

### 1. はじめに

大学で学ぶ留学生にとって、大学の専門科目の講義に参加することは様々な困難がある。講義の構造を捉える、専門用語を認識する、ノートをとる、リアクションペーパー (= 担当教員の課題に従って、学生が授業の最後にそれまでの内容をまとめたり、自分の意見を記述したりすること) を作成することなどである。筆者らはこれらの困難点に対応し、大学の講義が聴けるようになることを目標として、教材を開発し実践を進めてきた (福島ら 2009、福島・三宅 2011、三宅・福島 2012)。

講義が聞けようになることを目指す第一段階として、筆者らは、講義の構造を捉える活動を行ってきた。この活動では、講義における教師の発話に注目し、特に「では」「次に」など、話の内容が変わる言葉に注目することによって、講義の流れを把握できるよう支援してきた。この実践を行う中で、筆者らは、接続詞の重要性を認識するようになった。

そこで、筆者らは接続詞に注目し、講義資料を分析し、その結果を授業活動に取り入れる試みを行った。本稿では、接続詞の分析とその結果を紹介し、分析結果を反映した 2012 年度の授業実践を報告と、実践結果の分析と考察を行う。

### 2. 講義理解における接続詞の役割

石黒 (2007) では、大学の講義における接続表現の実態を、11 本の講義を対象に調査した。それによると、文頭に接続表現がついた文は 6717 文中 2481 文で、全体の 36.9% を占めているとした。また、講義に出現する接続表現のうち 44.7% が「で」、次に「それから」、「そ

して」などが続き、添加型の接続表現が多いと報告している。

表1 講義の重要な情報を表示する接続詞<sup>1)</sup>

| 接 続 詞      | 講義における情報の表し方   |
|------------|----------------|
| 「だから」の類    | 先行文脈の帰着点       |
| 「ということで」の類 | 先行文脈のまとめ       |
| 「つまり」の類    | 先行文脈の要点        |
| 「たとえば」の類   | 先行文脈を具体的に表す    |
| 「ところが」の類   | 先行文脈の予想外の展開を表す |
| 「では」の類     | 先行文脈が核心に入る     |
| 「ただ」の類     | 先行文脈の理解の補正     |

(石黒 (2007) を基に筆者が作成)

さらに、石黒 (2007) は、表1にある、ある一定の接続詞が講義の重要な情報の表示に役立っているとした。これを見ると、ある一定の接続詞が、次に続く文の内容が先行文脈とどのような関係にあるのかを示していることがわかる。そこで、筆者らがこれまで注目してきた、講義内容の話の変わり目の部分において、接続詞は、どのような役割を果たすのかを調査することにした。

### 3. 研究方法

本大学の「キリスト教入門」、「日本経済入門」、「環境経済学」の3本の講義資料(1講義約90分)を対象に、講義内容の話の変わり目における接続詞の出現について、分析した。

分析は、授業を録音・録画した講義の文字化資料を作成し、全資料を「文」<sup>2)</sup>単位に区分して、文番号をつけた。3本の講義の総文数は1317文であった。本論文で対象とする接

<sup>1)</sup> 石黒 (2007) によると、表1の接続詞の分類の内訳は次の通りである

| 接 続 詞      |   |
|------------|---|
| 「だから」の類    | だから、ですから、だからこそ                                  |
| 「ということで」の類 | ということで、そういうふうに、こういうふうに、このように、そんなふうに、以上(で)、したがって |
| 「つまり」の類    | つまり、要するに、いわば                                    |
| 「たとえば」の類   | たとえば、特に   |
| 「ところが」の類   | ところが、それが  |
| 「では」の類     | では、じゃ(あ)、それでは                                   |
| 「ただ」の類     | ただ、ただし、なお                                       |

<sup>2)</sup> 宇佐美 (2003) による、「実際の会話の中で発話された文」と定義されている「発話文」を採用した。この単位の認定は、間などを考慮することで行われ、機械的作業ではないため、文字化されたものを筆者ら2名がそれぞれ判定し、不一致箇所については、協議の上で決定した。

統詞は、石黒（2007）の認定基準を採用した。石黒（2007）のリストに含まれるものを対象とし、文頭にある<sup>3)</sup>こと、文以上の単位どうしを結びつけていること<sup>4)</sup>、接続助詞やフィラーは扱わないが、文頭で独立して用いられる「が」やフィラー化した「で」などは、接続詞として扱った。

石黒（2007）で対象としていたのは「文章表現論」「日本語学」などの講義であった。分野によっては、講義の進め方も異なり、教師の発話のあり方が異なる可能性もある。そのため、人文科学系のみならず、社会科学系の講義も含めた資料を選んだ。授業のスタイルは、「キリスト教入門」「環境経済学」は板書と配布資料により教師が進めていく方式で、「日本経済入門」はパワーポイントにより教師が進めていき、教師が用意した質問に学生が答え、それに対し解説を加えていく方式であった。

分析では、表2のように、まず講義の文字化資料を用い、教師の発話を【A】中心的内容、【B】Aの理解を助ける補足的な内容、【C】講義内容とは関係ない学生に対する発言、【D】話の変わり目を示す言葉や内容に分類した<sup>5)</sup>。次に、【A】～【D】の冒頭部分の表現を調べた。

表2 講義資料

| 発話番号 | 分類 | 接続詞 | メタ | 指示詞 |   |
|------|----|-----|----|-----|---|
| 3    | D  | で   |    |     | で、ここではですね、そういうことを、まず、3つ、ちょっと、挙げたいんですけど、……………  |
| 4    | A  |     |    |     | 地球温暖化問題が、世界最大の大国であるアメリカですね、それは、アメリカ問題としての側面をですね、非常に強く持っている。……………                        |
| 5    | D  | で   |    |     | で、えーと、今日お配りしたA3の図表を見ていただきたいんですけど、えっとー、まず⑤をみてください。                                       |
| 6    | A  | で   |    |     | で、えーとここではですね、気候変動枠組み条約に至る80年代、90年代の話をしたいんで、えー、温暖化ガスのデータも、ちょっと当時のやつをまず見てもらいたいんですけど。…………… |
| 7    | D  | で   |    |     | で、次にちょっと⑥を見ていただきたいんですけど、  |
| 8    | A  |     |    | これは | これは各国地域のGDPあたりCO2排出量ですね。で、その下にあります、……………  |

【A】～【D】の分類を表3で説明する<sup>6)</sup>。例えば、発話番号4は、「地球温暖化問題」など

<sup>3)</sup> 石黒（2007）にならい、フィラーの直後にあるものは文頭とし、二重使用のものは、最初のもののみを数えた。

<sup>4)</sup> 石黒（2007）にならい、一方が節など文より小さな単位でも、もう一方が文であれば、文相当を結んでいると判断した。

<sup>5)</sup> 分類は、筆者ら2名がそれぞれ判定し、不一致箇所については、協議の上で決定した。

<sup>6)</sup> 表2の資料とした講義は、「環境経済学」の授業である。この日の授業内容及び内容構成は、次のようである（授業で配布された資料を基に筆者が作成）。

テーマ「地球温暖化（気候変動）問題の特徴」

(1)「アメリカ問題」としての地球温暖化問題

20世紀文明＝American Way of Lifeの根本的な問い直し

化石燃料大量消費型エネルギー体系

大量生産・消費・大量廃棄社会の変革

(2) 公共財としての地球大気→フリーライダー問題

(3) 被害→リスクと不確実性

中心的な内容を示しているので【A】と分類した。その前にある発話番号3は、次の【A】に話が変わることを示しているので、【D】話の変わり目を示す言葉や内容と分類した。

そして、発話番号5は、配布資料⑤の内容に、発話番号7は、配布資料⑥の内容に、それぞれ入ることを示していることから、【D】とした。その後、それぞれの冒頭部分の表現を調べた。その結果、講義内容の変わり目となる【A】～【D】の冒頭の総文数270文に対し、接続詞が文頭についた文は、106文であり、割合にすると39.3%であった。それぞれの出現率を、表3に示す。

表3 【A】～【D】の冒頭部分における接続詞の出現率

| 講 義 名   | キリスト教入門 | 日本経済入門 | 環境経済学 |
|---------|---------|--------|-------|
| 接続詞の出現率 | 35.2%   | 36%    | 43%   |

各講義の出現率を見ても、35.2% (31文／88文)、36% (32文／89文)、43% (40文／93文)と、どの講義も高い割合で出現していることがわかった。次に、【A】～【D】冒頭部分における接続詞の出現率を、【A】～【D】ごとに分析したのが、表4である。

表4 【A】～【D】の各冒頭部分における接続詞の出現率

| 講 義 名                      | キリスト教入門         | 日本経済入門          | 環境経済学           |
|----------------------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 【A】 中心的な内容                 | 19.4% (7/36 文)  | 15.6% (5/32 文)  | 25.6% (10/39 文) |
| 【B】 A の理解を助ける<br>補足的な内容    | 0% (0/3 文)      | 16.7% (2/12 文)  | 10% (1/10 文)    |
| 【C】 講義内容とは関係ない<br>学生に対する発言 | 0% (0/10 文)     | 16.7% (1/6 文)   | 0% (0/2 文)      |
| 【D】 話の変わり目を示す<br>言葉や内容     | 61.5% (24/39 文) | 61.5% (24/39 文) | 69.1% (29/42 文) |

これをみると、どの講義においても、【D】 中心的な内容または補足的な内容への変わり目を示す言葉や内容に6割以上の接続詞が出現していることがわかる。接続詞は、話の変わり目に圧倒的に多く出現するということである。

表5 種類別接続詞の出現率上位3位

|   | キリスト教入門       | 日本経済入門        | 環境経済学               |
|---|---------------|---------------|---------------------|
| 1 | で<br>(20.5%)  | で<br>(15.7%)  | で<br>(26.7%)        |
| 2 | じゃ<br>(6.8%)  | じゃ<br>(5.6 %) | つまり／要するに<br>(10.8%) |
| 3 | だから<br>(2.3%) | 次に<br>(3.4%)  | 例えば<br>(3.2%)       |

さらに、出現した頻度の高い接続詞を、石黒 (2007) による分類を参考に分析したのが表5である。これを詳しく見てみると、「で」が3講義ともに出現率が高く、以降「じゃ」「つまり」などが続き、出現する接続詞はある程度限定されていることが確認できた。

講義資料を分析することで、講義における教師発話において、接続詞の出現頻度は非常に高いことがわかった。中でも、話の変わり目を示す部分を中心に接続詞が出現し、特に「で」が多く用いられるという点では、石黒 (2007) の結果を実証することができた。

一方で、石黒 (2007) で頻度が高かった「それから」「そして」は出現頻度が低かった。「で」の次に出現頻度が高かった接続詞は、「キリスト教入門」と「日本経済入門」では「じゃ」という転換型、「環境経済学」では「つまり」「要するに」であった。

石黒 (2007) では、話段<sup>7)</sup>という点からも講義資料を分析している。大きな話段を開始終了するには、転換型の「では」などの接続詞、比較的小さい話段の開始は順接型の「で」、添加型の「それから」、で、終了は順接型の「だから」「ということで」、同列型の「つまり」で表示されることが多いとしている。

この点から考えれば、「キリスト教入門」と「日本経済入門」は、大きな話段が多い傾向にあり、「環境経済学」は小さな話段の開始終了を頻繁に繰り返しているということになる。実際に授業の録画映像で確認してみると、「環境経済学」では、表やグラフなどを読み解き、それについて解説を行うという流れを何回も繰り返していた。「キリスト教入門」と「日本経済入門」は、録画から見た授業スタイルではその原因がわからなかったが、受講者が話の流れをつかみやすいように、話の転換をより明確にしていたという見方もできそうである。しかし、この点が社会科学系の講義の特徴といえるのかは、今後分析資料を増やして分析する必要がある。

次に、本調査の結果をもとに行った、留学生に対する講義理解のための実践を紹介する。

## 4. 授業の概要と実践内容

### 4.1 授業の概要

授業の目標:大学での講義を聞く上で求められるスキルを身につけ、自律的に運用できるようにする。

期 間:2012年4月～2012年7月全15回(週1回、90分)

対象者:日本語レベル上級12名。半年～1年の交換留学生4名、学群留学生8名。出身は、中国7名、韓国3名、ベトナム1名、日本1名である。

授業では、大学の講義の録画映像を見ながら、各回の活動内容に合わせたタスクを行った。そして、授業の最後には、各活動内容に合わせた課題が出された。授業後、学生は、自ら参加している専門科目の講義において、日本語授業で学習したことを実践し、日本語授業で出された課題を行った。さらに次の授業で、その課題を確認し、専門科目の講義でどう対応したのかを振り返った。

---

<sup>7)</sup> 話段とは、談話の直接的な構成要素であり、話し言葉の表現のまとまりである(佐久間1987)。

表6 授業スケジュール(2012年4月～7月)

| 授業回 | 授業の主な内容                           |
|-----|-----------------------------------|
| 1   | オリエンテーション、講義に必要なスキルを考える、ポートフォリオ作成 |
| 2   | 講義の構造、内容を理解する                     |
| 3   | 接続詞を捉える                           |
| 4   | 専門用語を理解する                         |
| 5   | 構造の復習、リアクションペーパーの練習①              |
| 6   | ノートテイキング、リアクションペーパーの練習②           |
| 7   | ノートテイキング、リアクションペーパーの練習③、意見の導入     |
| 8   | 中間の振り返り、講義実践準備                    |
| 9   | 講義実践①「情報と倫理」                      |
| 10  | 講義実践の振り返り                         |
| 11  | ノートテイキング、リアクションペーパーの練習④、講義実践準備    |
| 12  | 講義実践②「アメリカ民族論」                    |
| 13  | 講義実践 振り返り                         |
| 14  | 復習クイズ                             |
| 15  | 振り返り                              |

授業のスケジュールは、表6に示した。授業の2回目には、講義の構造を捉える活動を行い、教師の発話を【A】中心的な内容、【B】Aの理解を助ける補足的な内容、【C】講義内容とは関係ない学生に対する発言、【D】話の変わり目を示す言葉や内容に分類する活動を行った。そして、3回目には調査結果を活動に反映させ、接続詞を捉える活動を行った。

その後、ノートの取り方やリアクションペーパー作成の学習を行い、9回目と12回目にある「講義実践」でこれまでに学習したことを、実際に専門科目の講義に参加して実践した。

## 4.2 接続詞をとらえる活動

授業の第3回目に行った「接続詞をとらえる活動」について、取り上げる。

### 1. 接続詞を捉える

講義にでてくる接続詞は、ある程度決まっています。

<話の切れ目によく出てくる接続詞ランキング>

|   | 接続表現      | 例   | 役割・機能など   |
|---|-----------|---|---|
| 1 | で(順接)     | 多くの会社で競争が起こります。で競争に負けな<br>いように、企業は革新していきます。   | ①同じ話の内容が続く。②前の内容につけ<br>加える。                               |
| 2 | じゃ/では(転換) | では、そろそろ始めましょうか。<br>じゃ、授業を終わります。<br>では、今日はイエスの復活について説明します。<br>じゃ、別バージョンを紹介していきたいと思いま<br>す。 | ①授業の開始/終了を<br>示す②講義の本題(中<br>心的な内容)に入るこ<br>とを示す③話題を変え<br>る |

図1 教材①話の変わり目に出現しやすい接続詞



まず、図1のように、話の変わり目に出現しやすい接続詞「で」「じゃ」「つまり」「それから」「例えば」などを紹介し、その機能を確認した。例えば「で」は、「**多くの会社で競争が起こります。で、競争に負けないように、企業は革新していきます。**」といった講義の発話例を見ながら、「で」が同じ話の内容を続けたり、前の話に付け加えたりする働きもあるなどの機能を確認した。同様に、「じゃ/では」は、授業の開始や終了時を示す働きがあることや、講義の本題に入ることを示す働きがあることなどを確認した。

<練習1>

\_\_\_\_\_の接続詞はどんな働きをしているでしょうか。上の表を参考に考えなさい。

3) ①のグラフを見ると、自動車関連が11.0パーセントと。

つまり、1割強の、日本の10人に1人はですね、何らかの形で、自動車の関連の産業で働いているということにもなるわけなんです。

4) いろんな会社が実は我々の身の回りにあって、いろんな製品やらサービスやらを提供してくれているから我々の生活が成り立っている、あるいはどんどん豊かになっていく、便利になっていく、そういう側面があります。

で、企業は何のためにやっているんだろうか。慈善活動でやってるわけじゃないんですね。

図2 教材②接続詞の働き

次に、それらの接続詞が使用されている講義の発話部分を見て、接続詞の具体的な機能を確認した。

例えば、図2教材②接続詞の働きの3)「つまり」は「**自動車関連が11.0パーセントと。**」という前に出てきたグラフの内容の、より詳しい説明である「**1割強の、日本の10人に1人は…自動車関連の産業で働いている**」という話がはじまるサインを示している。また4)では、企業の存在意義を紹介した後、「**で、企業は何のためにやっているんだろうか**」と、話題を変えるサインを示していることを確認した。さらに、文字化資料があるタスクシートに従って、講義の録画映像を見ながら、接続詞に注意して、発話の変わり目を捉える活動も行った。

実践後、学生が実際に履修している講義を聞き、接続詞とその機能、【A】の中心的内容を予告する表現、【A】の中心的内容をまとめる表現を確認する課題を出した。以下は、学生が提出した課題のうち、接続詞に関する部分である。

## 〈学生が提出した課題〉

### ① 科目名「日本語の文字・表記」

聴解とノートの課題

Date

。接続表現とその機能：

→ この文は「この絵はまだ未完成だ」、「未完成」というと、まだという意味も含められず。  
 (というとき、この文の中「まだ」は使えないです。

→ ということで、この上の理由として、結論を表す

レポート、卒論文を書くとき、参加資料があつた、きちんと資料名、著者編者、出版社、出版年、版次など書くのは必要なのです。

(例) 出版社：(株)小学館

「株」を書かなくてもよいですが、小学館を必ず書いてください。

→ 例では、くわい例ではと挙げるとき

→ (例) オペーションに掛りまして

→ (例) 課題を変えるとき

### ② 科目名「専攻入門言語」

では コミュニケーション何だと思っていますか？

内容の展開

### ③ 科目名「映像論」

・ えーと、(今日はですね～) / で、/ でちから、

\*フイラー ↳ 展開する ↳ 続く ↳ 内容補足  
 (授業が始まる) また詳しく説明する

課題を見ると、「日本語の文字・表記」の講義を履修した①の学習者は、講義から「ということで」という接続詞が結論を示していることを聞き取ったことがわかる。また、②の学生は、「専攻入門言語」の講義に参加し、「では」という接続詞が内容を展開する働きがあるとまとめていた。そして、「映像論」の講義を履修した③の学生は、接続詞「で」が「話を続ける」機能があることや、接続詞「ですから」が「内容補充、または内容を詳しく説明する」機能があったことを確認し、フィラーと区別して理解していることがわかる。

## 5. 実践結果

実践終了後に、学生に授業についてインタビューを行った<sup>8)</sup>。

授業を履修した学生の多くは、これまで講義においては、接続詞を特に意識して聞いていなかったようだった。特に、次の学生の発言からは、この実践での活動を通じて、講義



における接続詞の重要性を再認識し、中でも「で」に注目していることが窺えた。

学生「接続詞は『そして』や『しかし』などを勉強したが、講義の話の中ではそういう接続詞があまり出てこなくて、講義ではほかの接続詞、たとえば「で」「それで」がたくさん出てくるのが今回わかった。」

この学生は、これまでの日本語学習、例えば読解活動や作文活動などにおいて、重要だと認識していた接続詞「そして」や「しかし」が講義における教師発話には少ないことに気づいたようである。また、それとは異なる接続詞「で」、「それで」を、講義理解のために意識するようになったとも語っている。

石黒 (2007) においても、新聞の接続表現との比較調査から、「講義の接続表現は順接基調であり、新聞の接続表現は逆接基調である」(2007: 57) としているように、講義を聞く上では、これまで学んできた接続詞とは異なる接続詞にも注意する必要があるだろう。

また、数名の学生から、「接続詞がわかると、次の内容がわかる」「接続詞から、話が変わるのに気付く」というように、接続詞を意識することで、次の内容を予測できるという発言もあった。さらに、「接続詞を意識しているから、講義の流れみたいなのができるようになった。」と接続詞に対する意識化がきっかけとなり、講義全体の構造を捉えているという発言もあった。

最後に、「接続詞を意識するようになって、重要なポイントがわかるようになった。」「接続詞を気にすると中心的内容がわかりノートがとれるようになった。」など、接続詞の役割を認識することで、中心的内容を理解できるようになり、さらに理解したことを授業のノートに取れるようになったという意見もあった。

## 6. まとめ

本実践の結果、接続詞を意識することで、内容を予測したり講義の構造を認識したりすることができ、講義全体へ理解とつながっていることが示唆された。そして、講義の構造を認識できたことが、講義の要点への理解へとつながり、要点にそったノートのまとめへとつながっていることも窺われた。

講義に出現する接続詞は、これまでの読解、作文などの日本語学習で使用される接続詞とは異なるものもある。しかし、講義に出現する接続詞は種類が限定されており、授業に

---

8) 学生に対するインタビューは、授業終了の時期に、授業を履修した学生のうち、調査研究への協力に同意した学生に対して、1人約30分程度行った。インタビューは、半構造化インタビューで、インタビュー項目①～⑥を話の内容に応じて行った。

インタビュー項目：

- ①授業を受けてみて、どうでしたか。
- ②授業を受けて、役に立った点はどんなことですか。  
またそれはどうしてだと思いますか。
- ③授業を受けても、あまりよくできるようにならなかったことはどんなことですか。またそれはどうしてだと思いますか。
- ④この授業を受けて、自分が履修している専門科目の講義へ参加するとき、変化があったと、自分で感じることはありましたか。それはどんな時ですか。
- ⑤9回目と12回目で実践講義を行いました。参加してみてどうでしたか。
- ⑥授業で扱ったこと以外で、講義に参加するとき、困っていることはありますか。

において導入するのは難しくない。接続詞の種類や機能を確認し、それを講義を聞く際に意識することを支援すれば、講義の要点がつかめ、ノートも取りやすくなり、講義の評価の一部となるリアクションペーパーの作成もしやすくなる。この点から、大学の専門科目の講義に参加することの支援となると考える。

今回は、講義スタイルにより出現する接続詞の種類が異なる傾向も見られたが、分析対象となる講義資料が少ないため、限定的な結果である可能性がある。今後は、講義資料を増やし、分析を続けたい。

また、分析資料には、接続詞以外にも、話の変わり目となる役割を果たしているものが見られた。講義の構造をさらに明確に把握していくには、指示詞や副詞など接続詞以外にものものにも分析対象を拡大する必要がある。

## 付記

- ・本実践の準備及び講義資料の分析は、著者二人の討議で進め、三宅がインタビューデータ収集及び分析、福島は、実践授業を担当した。また、本稿は、2012日本語教育国際研究大会口頭発表「講義理解を支援する日本語授業の取り組み―重要情報を提示する接続表現に注目して―」に、三宅が大幅な加筆修正を行ったものである。

## 謝辞

- ・本実践は、桜美林大学日本語プログラムにおいて、以下の各氏との共同により進めてきたものである。阿曾村陽子、今井美登里、家田章子、坂巻延子（2003～2009年）齋藤伸子、槌田和美（2010年）との共同によるものである。（五十音順、敬称略）
- ・授業実践にあたり、これまで桜美林大学において以下の講義にご協力をいただいた。講義を担当する先生方に感謝する。「キリスト教入門」「環境経済論」「日本経済入門」
- ・「日本語演習（上級・聴解とノートの取り方）」を受講した留学生全員の協力に感謝する。受講生の協力なしには、この研究は成立しえなかったものである。
- ・本研究は、桜美林大学言語教育研究所より助成を受けたものである。

## 参考文献

- 石黒圭（2007）「講義の談話の接続詞」西條美紀（研究代表者）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』pp54-63、2004～2006年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 宇佐美まゆみ（2003）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成13-14年度科学研究費補助金基盤研究C（2）（課題番号：13680351）（研究代表者：宇佐美まゆみ）研究成果報告書：pp4-21.  
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>（2013.2.20 ダウンロード）

- 佐久間まゆみ (1987) 「『文段』認定の一基準 (I) — 提題表現の統括 —」『文芸言語研究言語編』 11 筑波大学文芸・言語学系 pp89-135
- 福島智子・三宅若菜・今井美登里 (2009) 「大学講義の理解を目指した日本語授業の試み — 専門科目の講義を素材として —」『第31回大学教育学会大会発表要旨集録』 pp170-171
- 福島智子・三宅若菜 (2011) 「日本語授業における大学講義参加の取り組み」『第33回大学教育学会大会発表要旨集録』 pp168-169
- 三宅若菜・福島智子 (2012) 「講義理解を目指した日本語学習の実践 — 留学生に対する学習デザインの提案 —」『桜美林言語教育論叢 第8号』 pp159-171